

これからの災害に強い都市づくり

時々上京してビルに囲まれた空間を歩く機会がありますが、以前はあまり気にしていませんでしたが、最近の地震や豪雨災害を知ってから気になっていることがあります。

これだけのビルやマンション群は、大都会の象徴ではありますが、急に何か大きな自然災害があったらどうなるのかとかいずれば寿命が来るであろう構造物はどうなっていくのだろうか、上物は立派でも足元の地盤はどうなんだろうかなど、心配は杞憂のようでもありすぐ後ろから忍び寄っているような気がします。

もとは土地がない、利便性というようなことからの光景ではありますが、災害リスクはあまり考えない、それこそライフサイクル的に考えたなら、あまり先を考えていないような気がしています。そして、最近では高層マンションの自然災害時の脆弱さを示すような被害や影響が出てきています。それは、水や電力にかかわる生活困難、エレベータ、空調といったものの機能停止、周囲や地下への豪雨時の浸水といったことです。もちろん、平時は何でもないようでも、想定外とか経験していない、聞いていないということがないようにするにはどうすればよいのか。静穏時に嫌なことを想定するというのは大変につらいのですが、これがまた、防災というものの性格でもあります。

これからの都市は、地方の縮小と反比例するように膨張の傾向が止まらないかもしれません。まず、考えなければならないのは、これ以上の無謀な土地利用を抑制しないといけないと思います。利用可能な土地を拡大しようとするれば、何らかの改変が必要になりますし、新たなところでの規模の大小は別にしても造成することになります。そのような行為は自然災害のリスクを増すということにもなりますし、不必要な災害出費になる可能性が高くなります。とにかく、自然災害における防災は、その対象になるものを減らすことが重要です。それには土地利用を見直すこと、リスクを無視したものを経済性だけで決めないということを基本に置くべきだと思います。現在の状況がそのようなところでは、ハード対策一点張りでは屋上屋を架すような投資になりますので再考し、新たな発想で対応する必要があります。例えば、明らかに居住域に適さないところは、安全なところに移転を促すとかコンパクトシティ化するとかして回避する方法を案出することです。また、河川の周辺や土石流の履歴や危険が想定される場所は、かつての地形を再現すれば、災害リスクをある程度明らかにできると思います。そのようなところは生産基盤や人が常時居住しないところとして利活用するようにしなければならないと思います。そうすることも完全な防災対策にはなりませんので、補足するようなソフト対策が必要になります。しかし、ハードもソフトも他人任せ、行政任せではいけません。住民はもちろん、企業などの組織が情報を共有することをしていかないといけません。自然災害の防災は、間違いなくまちづくりですので、都市計画、住宅構造、公園の配置といったインフラの一体化を防災という視点から見直すべきです。そして、重要なことは理念をしっかりと打ち立てて、ぶれないで進めることが必要です。状況によっては、個人的に不利益を感じることもあるかもしれませんが、100年、1000年の計であるという信念こそ必要だと考えます。